

長野県産シダ植物の新産地 (6)

上野 勝典*・上野 由貴枝*

New localities of some pteridophytes in Nagano Prefecture (6)

Katsunori Ueno and Yukie Ueno

マツバラン (マツバラン科)

Psilotum nudum 写真1

・松本市中山 700 m 2011 年 1 月 1 日

NAC 160055

住宅地の道路わきのコンクリート壁の隙間からマツバランが生えているのを見つけた。住居の人によれば、3 年ほど前から自然に出てきて、現在では地上茎が 4 本ほど出ており、だんだん増えているとのことだった。マツバランは古くから園芸品として好んで栽培されてきたため、おそらく園芸の逸出がたまたま生育できたものと想像される。したがって新産地というよりは、特異な例として報告する。全国的には宮城県から沖縄県の暖地に分布している。近県では愛知県や神奈川県で観察したことがあり、石垣の隙間や、ヘゴなどの幹に着生していることが多いが、地面から出てくることもある。

コハナヤスリ (ハナヤスリ科)

Ophioglossum thermal var. *nipponicum* 写真2

・平谷村西町 1100m 2009 年 7 月 11 日

NAC 158484

道路脇の日当たりの良い場所にセイヨウウツボグサが咲いていたので、それを観察していたところ、小さなハナヤスリ類がその周辺に多数群生しているのに気がついた。長野県でよく見かけるコヒロハハナヤスリと比べると極端に小さく、また栄養葉の形がより細いことから別の種とわかった。後日標本を東邦大学の佐橋紀男氏に見ていただいたところ、コハナヤスリと同定された。コハナヤスリは栄養葉に柄が無いことでコヒロハハナヤスリと区別される。また、栄養葉のもっとも広い部分が中央より上にあるものがハマハナヤスリで、本種は幅の広い部分が中央より下にありハマハナヤスリの変種とされている。ただし、コハナヤスリは葉の形が変化し、ハマハナヤスリとの区別が難しいことが多い。

長野県ではハマハナヤスリが、1931 年に飯山市で横内齋氏によって採られた記録がある（大塚

1991）。またコハナヤスリは『信濃植物誌』（横内 1983）に記載があるものの、『長野県版レッドデータブック』では情報不足（DD）とされている。

チチブホラゴケ (コケシノブ科)

Crepidomanes schmidtianum

・木曽町木曽福島正沢川 1450 m

2009 年 8 月 13 日 NAC 158483

急斜面の岩場にコケシノブ類の小さな群落があ



写真1 マツバラン 松本市中山 2011 年 1 月 1 日



写真2 コハナヤスリ 平谷村西町 2009 年 7 月 11 日

* 上野勝典・上野由貴枝 〒399-0011 松本市寿北 2-2-38



写真3 ハイホラゴケ 根羽村万場瀬
2010年5月6日



写真5 ナガバヤブソテツ 塩尻市上西条
2009年10月25日



写真7 ウスバミヤマノコギリシダ
南木曽町柿其峠 2010年7月17日



写真4 ヤシャイノデ 飯田市上村尾高山
2009年9月24日

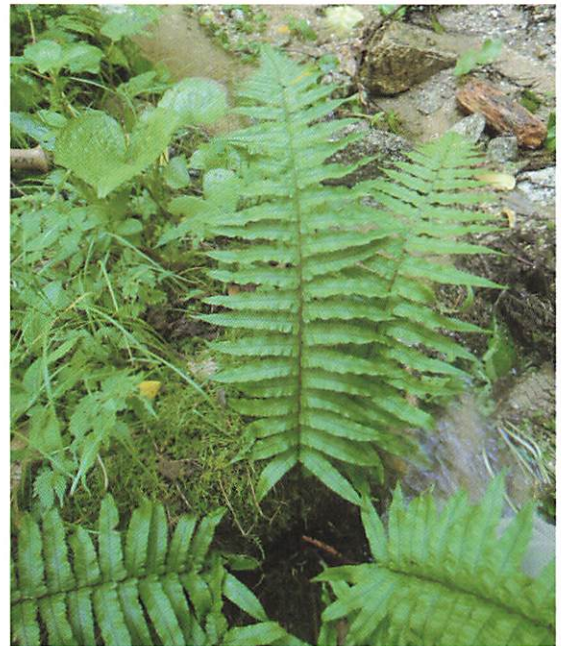


写真6 キヨズミオオクジャク 大桑村田光
2010年7月18日

り、根茎に毛が密生していた。孢子囊群をつけていなかったため同定が困難だったが、小型で羽片の形などからチチブホラゴケと同定した。本種の孢子囊群は包膜がコップ状で周辺が反り返るなどの特徴がある。木曽谷側では、塩尻市の釜の沢や奈良井川で観察したことがある（上野・上野 2006）が、分布は県内では限られている。

ハイホラゴケ（コケシノブ科）

Crepidomanes birmanicum 写真3

・根羽村万場瀬 550 m 2010年5月6日

NAC 160039

小さな流れの脇の岩にハイホラゴケが群生しているのを見つけた。羽片がやや立体的に曲がっていたので、ヒメハイホラゴケの可能性もあったが、両者の区別をするには差が微妙だったので、ここではハ

イホラゴケとした。ハイホラゴケは以前天竜村でも観察したことがあり（上野・上野 2006）、暖地性のシダである。

日本のハイホラゴケ類は、最近遺伝子レベルで詳細に調べられ、これまでのハイホラゴケ、オオハイホラゴケ、ヒメハイホラゴケ等とそれらの雑種や雑種起源の種の 12 種類に再分類された (Ebihara et al. 2009, Ebihara 2009)。Ebihara(2009)によると、長野県では栄村と阿智村の標本が調べられており、どちらもハイホラゴケとヒメハイホラゴケの雑種であるコハイホラゴケと命名され、新分類におけるハイホラゴケ類の中では最も分布域が広い。しかしながら、これらは外見だけで区別をすることが困難と思われ、県内でこれまで記録のあるハイホラゴケやヒメハイホラゴケとされたものが新分類ではどのようなものか、今後の課題である。なお、ハイホラゴケおよびヒメハイホラゴケの学名はそれぞれ、*Vandenboschia kalamocarpa* および *V. nipponica* とされた (Ebihara et al. 2009)。

トヨグチイノデ (オシダ科) *Polystichum ohmurae*
・伊那市小黒川 1200 m 2009 年 9 月 13 日
NAC 158486

中央アルプスの茶臼山登山道へとつながる小黒川溪流の岩場で、数株のトヨグチイノデを見つけた。周辺を探してみたが、その数株以外は見つけれなかった。トヨグチイノデは県内では南アルプスを中心に分布しており、ほぼ全県の標高 1000 m 付近で見ついているが、どの自生地でも個体数は少なく稀にしか見ることができない。中央アルプスではこれまで記録がなかった。分布上もっとも近いところでは、木曽谷側の王滝村滝越付近で観察したことがあり、やはり溪流の岩場に数株が生育していただけだった。

チャボイノデ (オシダ科) *Polystichum igaense*
・泰阜村唐笠 450 m 2010 年 3 月 22 日

溪流脇急斜面のところどころにチャボイノデがツヤナシイノデとともに点々と生育しているのを見つけた。チャボイノデは県南部に分布している暖地性のシダで、小型のイノデモドキによく似ている。イノデモドキと比較して、胞子囊群がより辺縁に付き、またより小さい。りん片の縁はイノデモドキほどには切れこまず、ねじれる傾向が強い。県内では天竜村、阿南町、旧南信濃村、根羽村で観察したことがある（上野・上野 2007）。

サイゴクイノデ (オシダ科) *Polystichum pseudomakinoi*
・辰野市上島 800 m 2010 年 2 月 28 日
NAC 160040

用水路わきのスギ林斜面に数株のサイゴクイノデが生育していた。サイゴクイノデは、県南部を中心に分布する暖地性のシダだが、近年松本市や塩尻市、小布施町でも見つかり（上野・上野 2005、上野・上野 2007、竹重 2009）、近年県中部でも見られるようになっている暖地性シダの一つである。

ヤシャイノデ (オシダ科) *Polystichum neolobatum*
写真 4

・飯田市上村尾高山 2009 年 9 月 24 日

尾高山中腹の針葉樹林下で、石灰岩が交る岩のゴロゴロした急斜面のやや湿ったところに、ヤシャイノデが一株のみで生育しているのを見つけた。周辺を捜したがほかには見つかることができなかった。上村北又沢はヤシャイノデの生育地として知られており、神奈川県の自生地とともに標高 1000 m 付近であるが、今回見つけた場所は亜高山帯であることから、新産地として報告する。前年の葉が 2 枚と当年の葉が 1 枚で、まだ胞子囊群をつけるほどには生育していなかった。周囲にはオシダ、ホソイノデ、イワシロイノデ、シラネワラビ、ナンタイシダなど温帯性シダが多数生育していた。シカの食害の痕が多く見られるものの、ガレ場となっているために食害を逃れて生育できたものと想像された。

キヨズミオオクジャク (オシダ科)
Dryopteris namegatae 写真 5

・大桑村田光 720 m 2010 年 7 月 18 日
NAC 160037

スギ林下の溪流脇の水に浸りそうな場所に、オオクジャクシダかイワヘゴかと思われるシダが数株見られた。りん片が黒くまた葉面の色も濃い緑色だったため、イワヘゴかと思われたが、胞子囊群が軸寄りには付かず、どちらかといえば辺縁に寄っていたため、オオクジャクシダとも考えられた。標本を持ち帰り、詳細に検討した結果、上記の特徴に加え、
・葉柄基部のりん片には突起がほとんど出ず、中軸のりん片には長い突起が明瞭に出る、
・下部羽片はあまり縮小しない、
・オオクジャクシダのような葉脈表面のへこみははっきりしない、
などの特徴から、キヨズミオオクジャクと同定した。県内では近年、中野市での報告（竹重 2010）

があるほか、大塚孝一氏から小谷村、阿南町での記録があるとの情報をいただいた。本種の特徴はオオクジャクシダとイワヘゴの中間的な形質をもっており、同定が比較的困難とされることから、これまであまり知られていなかった可能性がある。

ナガバヤブソテツ (オシダ科)

Cyrtomium devexiscapulae 写真 6

・塩尻市上西条 850 m 2009 年 10 月 25 日

NAC 158482

古い石灰岩採掘跡地のような場所の岩陰に、ナガバヤブソテツの幼株を一株見つけた。葉は 2 枚ほどで、孢子囊群はつけていなかったため、最近進出してきたものと思われる。ナガバヤブソテツは暖地性のシダで、最近県南部の天竜村の 2 か所で見つかった (上野・上野 2006、上野・上野 2009)。本種はオニヤブソテツによく似ているが、より内陸に生育しており、羽片の形の並行になる部分が長く、質がより薄い。筆者の観察では、オニヤブソテツは葉の裏の葉脈が強く盛り上がるのに対して、ナガバヤブソテツではほとんど盛り上がりず平坦であることから、容易に区別できる。

ウスバミヤマノコギリシダ (イワデンド科)

Diplazium mettenianum var. *tenuifolium* 写真 7

・南木曾町柿其峠 850 m 2010 年 7 月 17 日

NAC 160038

柿其峠途中のスギ林下の 3 m 四方程度の領域に、ウスバミヤマノコギリシダが小群落を作っていた。本種はミヤマノコギリシダの変種とされ、葉の切れこみがより大きく、また質も薄い。県内では天竜村、大桑村、南木曾町に記録があるものの、南木曾町での標本の記録が不明であったため報告する。以前、大桑村で観察したことがある。

イワオモダカ (ウラボシ科) *Pyrrosia hastata*

・下條村大久保 400 m 2010 年 3 月 22 日

NAC 160043

天竜川に面した比較的日当たりの良い岩場に、イワオモダカが点々と生育していた。イワオモダカはやや乾いた岩場に着生し、ほぼ全県に点在しているが、個体数は少ない。近くでは泰阜村や天竜村で観察したことがある (上野・上野 2009)。

謝辞

シダ植物の同定、関連の参考文献の紹介や分布情報の提供、ならびに本報告の作成にあたり、貴重な助言をいただきました長野県環境保全研究所 & ハーバリウム (NAC) の大塚孝一氏に心より感謝の意を表します。また、コハナヤスリの同定をしていただきました東邦大学の佐橋紀男氏に心より感謝の意を表します。

引用文献

- Ebihara, A., S. Matsumoto and M. Ito (2009), "Taxonomy of the Reticulate Vandenboschia radicans Complex (Hymenophyllaceae) in Japan". *Acta Phytotax. Geobot.* 60(1):26-40 (2009)
- Ebihara, A. (2009), "Notes on the Distribution of the Vandenboschia radicans Complex (Hymenophyllaceae) in Japan". *Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B*, 35(2): 71-89 (2009)
- 長野県 (2002) 長野県版レッドデータブック維管束植物編.
- 長野県植物誌資料集作成委員会 (2005) CD-ROM 長野県植物誌資料集 (普及版).
- 大塚孝一 (1991) 長野県のシダ植物雑記 (6). 長野県植物研究会誌 24: 42-43.
- 竹重聡 (2009) 千曲川右岸スギ林のシダ新産地の環境特性～イノデ類とイワヘゴの記録経緯と分布拡大を考える～. 長野県植物研究会誌 42: 51-58.
- 竹重聡 (2010) 長野県内キヨズミオオクジャクの新産地報告. 長野県植物研究会誌 43: 63-64.
- 上野勝典・上野由貴枝 (2005) 長野県産シダ植物の新産地 (2). 長野県植物研究会誌 38: 133-136.
- 上野勝典・上野由貴枝 (2006) 長野県産シダ植物の新産地 (3). 長野県植物研究会誌 39: 123-127.
- 上野勝典・上野由貴枝 (2007) 長野県産シダ植物の新産地 (4). 長野県植物研究会誌 40: 237-240.
- 上野勝典・上野由貴枝 (2009) 長野県産シダ植物の新産地 (5). 長野県植物研究会誌 42: 71-74.
- 横内斎 (1983) 信濃植物誌. 信濃植物誌刊行会.